

価値の再発見

—遊び、古典、新聞—

季刊誌 第7号

—2022 年冬号—

一般社団法人

子ども未来・スポーツ社会文化研究所



はじめに

価値の再発見 ー遊び、古典、新聞ー

子ども未来・スポーツ社会文化研究所「季刊誌第7号：2022年冬号」をお届けします。

われわれの日常生活に当たり前のよう存在している事柄は、その価値を見逃しがちです。今期（第19～21回セミナー）では、「遊び」、「古典」、「新聞」といった普段取り立てて注目しない事柄に焦点を当て、その価値を再考してみることにしました。その上で、新たな価値の再発見を通して未来の社会を描きます。

第19回セミナーでは、「未来の学校 5ー遊びから学校教育における空間・時間・仲間を相対化するー」と題して、杉本厚夫氏（代表・京都教育大学／関西大学名誉教授）にお話をいただきました。「未来の学校」を考えるシリーズの5回目です。遊びにおける空間・時間・仲間（いわゆる三間）から、現在の学校教育の在り方を見直してみると、課題が見えてきます。その課題解決を検討することで、未来の学校を描いてもらいました。また、小中一貫の学校長と学校法人の運営に関わっていらっしゃる方に、現場からのご意見を伺いました。

第20回セミナーでは、「古典をいだし 古典に抱かれてー古典ってなんだろうー」と題して、山本壯太氏（「古典の日推進委員会」アドバイザー）にお話をいただきました。古典というと面白くない古文の授業が思い出されますが、今も古典が子どもたちから親しまれているようには見えません。「古典」は時代を超えて受け継がれ、われわれ日本人の血肉を形成してきました。千年前の人々も今の私たちも同じ人間としての喜びや悲しみを共有しているのです。子どもたちに「人間とは何か」を分かりやすく伝えることこそ、古典を学ぶ基本であり、日本人としての誇りを学ぶことだと結論づけられました。

第21回セミナーでは、「2020年オリンピック東京大会におけるスポンサーシップと新聞報道」と題して、森津千尋氏（会員・宮崎公立大学准教授）にお話をいただきました。オリンピックを取り巻くメディア環境やスポンサーシップが変化していくなか、2020年東京大会では、「東京方式」として多くの国内企業がスポンサーとなり、新聞カテゴリーでも複数の新聞社がスポンサー契約を結んでいました。「報道機関」が五輪スポンサーとなることで、その記事(社説)にどのような変化が生じるのかを分析し、また2018年平昌大会時の日韓の報道とも比較しながら、オリンピックとメディアの関係について考察されました。

ご一読いただき、皆さんからの忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

<目次>

●第19回セミナー・・・P.3～

- ◆ テーマ：未来の学校 5ー遊びから学校教育における空間・時間・仲間を相対化するー
- ◆ 日時：2022年9月22日（木）20時から21時30分まで
- ◆ 方法：ZOOMによるオンラインセミナー
- ◆ ナビゲーター：杉本厚夫（代表・京都教育大学／関西大学名誉教授）
- ◆ コメンテーター：市橋公也（会員・宇治黄檗学園校長）
小川健一郎（会員・大阪YMCA総主事）
- ◆ ファシリテーター：速水 徹（主席研究員・立命館大学客員教授）

●第20回オープン・セミナー・・・P.16～

- ◆ テーマ：古典をいただき 古典に抱かれてー古典ってなんだろうー
- ◆ 日時：2022年10月20日（木）20時から21時30分まで
- ◆ 方法：ZOOMによるオンラインオープン・セミナー
- ◆ ナビゲーター：山本壯太（「古典の日推進委員会」アドバイザー）
- ◆ コメンテーター：速水 徹（主席研究員・立命館大学客員教授）
- ◆ ファシリテーター：杉本厚夫（代表・京都教育大学／関西大学名誉教授）

●第21回セミナー・・・P.29～

- ◆ テーマ：2020年オリンピック東京大会におけるスポンサーシップと新聞報道
- ◆ 日時：2022年11月11日（金）20時から21時30分まで
- ◆ 方法：ZOOMによるオンラインセミナー
- ◆ ナビゲーター：森津千尋（会員・宮崎公立大学准教授）
- ◆ コメンテーター：黒田 勇（理事・関西大学名誉教授）
- ◆ ファシリテーター：杉本厚夫（代表・京都教育大学／関西大学名誉教授）

《第19回セミナー》

未来の学校 5

ー遊びから学校教育における空間・時間・仲間を相対化するー

杉本厚夫（代表・京都教育大学／関西大学名誉教授）

はじめに

コロナ禍は、今までの学校教育で当たり前だと思っていたことが、当たり前ではないことに気づかせてくれました。これを相対化と言います。それは、これまでの経験を相対化することに他なりません。17歳の高校生が総理大臣となって社会を変えていくというNHKドラマ「17歳の帝国」の最終回で、「経験は時として人を臆病にさせる。何かを得る代わりに、大切なものを失っていく」というセリフがありました。

そこで、学校教育の大切なものを見つけるために、今回は子どもたちを夢中にさせる遊びから学校教育を相対化してみたいと思います。

かつて子どもたちが遊べないのは、「空間・時間・仲間」の三間（サンマ）が減少したことが要因であるといわれました〔仙田, 1984〕。つまり、都市化によって子どもたちの遊ぶ「空間」が少なくなり、習い事に追われて放課後遊ぶ「時間」がなく、少子化や人間関係の希薄さによって、遊び「仲間」が減ったことが原因で遊べなくなったということです。本当にそうでしょうか。

そこで、遊びにおける「空間」「時間」「仲間」について再考し、そこから現代の学校教育を相対化し、未来の学校について提案してみたいと思います。

1. 空間について

1-1 多元的現実としての遊び

これまで一般的には、遊びは非日常（ウソ）で、日常（ホント）とは二項対立の関係にあると思われてきました。

しかし、社会学的見方からは、遊びは日常生活における多元的現実のひとつであると考えます。それゆえ、そこにはルールや道具といった他の日常生活と同じ秩序を保つためのシンボルが存在するのです。そのシンボルは「これは遊びである」という意味が付与されており、そのことによって、遊びというひとつの現実（reality）を構成していると考えます。

ゴッフマンによれば、生活における基礎フレーム（Primary Frameworks）が、遊びとして転形（keying）されたフレームによって区切られた各々のリアリティが存在する〔Goffman, 1974〕ので、「ボクシング」を「喧嘩」と間違えることはないのです。

1-2 フレーム崩しによる遊びの価値の創造

さらに、そのフレームは遊びにおいて新たな展開を見せます。メリーゴーランドという遊びを考えてみましょう。

メリーゴーランドに乗る人は、はじめは騎手として乗っていましたが、年齢が高くなるにつれて、わざと鞍の上に立ったり、他の馬に乗り替わったり、馬の耳や尻尾を掴んだりします。この行為は、騎手として期待される行為から、ある一定の距離をとった逸脱行為であり、ゴッフマンはこれを「役割距離 (Role Distance)」と呼びました [Goffman, 1961=1985: 114-118]。そのような乗り方に興じることで、メリーゴーランドという遊びのフレームから逸脱し、一種のフレーム崩し (Breaking Frame) [Goffman, 1974: 5] が起きます。そのことによって、メリーゴーランドという遊びがどのような遊びなのかという意味が明確になると同時に、新しい遊び方の提示によって新たな意味づけ、すなわち価値を創造することになるのです。

1-3 回帰による価値の再認識

さらに、元のフレームに回帰 (Downkeying) する錯覚を引き起こします。

たとえば、「おままごと」のような模倣遊びは、基礎フレームとしての生活を転形することで成立します。しかし、それが単なる真似事としての遊びであると思っているうちは遊びになりません。まるで、生活しているような認識を持たなければならないのです。そして、その場の演技を完ぺきにこなさない限り面白くありません。つまり、コスプレがそうであるように「なりきる」ことが求められるのです。

このことは、「これは遊びだ」という認識の反面、「これは遊びではない」という転形と回帰のパラドックスの中で、遊びはその面白さを担保しているのです。この回帰は、基礎フレーム自体の意味を相対化することになります。

このような空間の認識に立って、遊びをみていきましょう。

1-4 街を遊び空間に転形する

2021 年の東京 2020 オリンピック競技大会で注目を集めた「スケートボード」は、もともと、街の中の階段やスロープ、手すりを遊び空間に転形し、パフォーマンスを披露し合った遊びでした。また、街自体を遊び場に変える「パルクール」も、遊び空間の創造という面では通底します。さらに、ストリートバスケットボールと呼ばれていた 3 人制バスケット「3 × 3 バスケットボール」も道路を遊び空間に転形することで行われていました。歩行者天国、都市型マラソン (大阪マラソンなど) も道路を遊び空間に変える点で共通します。

このようにして、創られた遊び空間は、元の空間に回帰することによって、その空間の価値を改めて認識することになるのです。

つまり、これらの遊びは、街なり道路を相対化することによって、人間の生活にどのような意味を持っているのかを明らかにしてくれます。

以上のことから、「遊びの空間がなくなったのではなく、遊び空間に変える力がなくなっただけなのだ！」といえるのではないのでしょうか。

1-5 アクションプラン A：学校空間の新たな構築

そこで、未来の学校の空間について次のような提案をしたいと思います。

① 学校（教室）を遊び場に変える

- ・ 遊び場としての学校（教室）空間を、子どもたちとデザインすることで、学校を創造の場に変えます。
- ・ 管理システムとしての学校空間を再考することで、子どもの自主性を引き出す場に変容させます。

② 地域を学校に変える

- ・ 地域をふしぎ発見と実践の場として捉えなおすとともに、地域の大人（社会的親）の関り方の理解を深めます。
- ・ 地域の人が学ぶ場として学校空間の意味を捉えなおします。

③ 家を学校に変える

- ・ 家を「生活」を学ぶ場として捉えなおし、子どもの知的好奇心を促します。
- ・ 家を AI/ICT の活用による学びの場とすることで、保護者と学校の協働を促進します。

2. 時間について

2-1 遊びの時間と学校・仕事の時間

いつ遊びが終わるかは、遊び手の自由だと考えられがちですが、それは時間の問題ではなく、その遊びに飽きたときにしか遊びは終わらないということである〔西村，1989〕と西村氏はいいます。それは時間で遊びが制限されないということを意味しています。

逆に、近代時間に取り込まれ、時間で制限されたスポーツの存在は、時間で制限しなければ永遠に続くという意味において、遊びが時間に制限されないという証でもあるのです。

しかし、学校時間はそのことを許しません。授業時間数が決められており、それに沿って時間割が設定され、授業時間の中で学習すべき内容が子どもたちに求められます。そこでは、個人の学習能力に合わせて授業が進められることは稀で、多くの場合、クラス全体で画一的に教師が学習内容を教えるという作業が続きます。遊び研究のチクセントミハイの言葉を借りれば、授業時間は課題が簡単にできる子にとっては「退屈」であり、できない子にとっては「不安」以外の何物でもないと言っていいでしょう。さらに、学校での試験は時間内にたくさんの問題を解く能率化、つまり単位時間当たりの生産量を高めることが求められます。

なんで、このような学校時間になったのでしょうか。

私が幼いころは「手に職をつけろ」といわれていました。これは、欧米の働き方の主流で、個人の特技（スキル）を活かした専門（スペシャリスト）で契約するという「ジョブ型」の働き方です。そこでは、職務給（能力給）が支払われます。

ところが、今の日本では「学歴をつけろ」といわれます。スキルではなく、知識の多寡（ジェネラリスト）で採用し、時間で働き、職場での人間関係の秩序を重んじる「チームワーク型」が日本の働き方だといわれます。そこでは職能給（時間給）が支払われます。

その結果どうなったかという日本企業の世界での凋落は著しく、時間当たりの生産量は、OECD38カ国中23位で平均以下です。つまり、時間で勉強することの延長線上にある時間で働くことは方向転換が迫られているといえます。

2-2 近代時間と可逆性

時間について真木氏は原始人と近代人とを比較して、次のように言います。

原始人は、牛の時間というのがあって、牛を放牧する時間、牛に餌を与える時間、搾乳する時間など、生活における「具体的な質としての時間」と捉えていました。しかし、異なった共同体が交流するようになって、共通した時間の設定が必要となり、1時間、2時間といった時計で計れるような「抽象的な量としての時間」となったと言います。

また、「原始人にとって意味があるのは、くりかえすもの、可逆的なもの、恒常的なものであり、一回的なもの、不可逆的なもの、うつりゆくものはその素材にすぎない。近代人にとっては逆に、くりかえすもの、可逆的なものの方が背景となる枠組みをなして、この地の上に、一回的なもの、不可逆的なものとしての人生と歴史が展開する」[真木, 2012: 61] と言います。

「積み木」という遊びを考えてみましょう。さまざまな形の木片を組み合わせ、魚や鳥や木といった自然物や建物や乗り物といった人工の造形物を3次元で再現します。その完成品を作品として飾る場合もありますが、それはこの遊びの本来の目的ではありません。積み木は、完成した作品を壊して元の木片に帰すところまでが遊びなのです。つまり、創ったもの（現在）を元の状態（過去）に還元するところにこの遊びの本質的な面白さがあります。その意味では、「不可逆性としての時間」を「可逆性としての時間」に転換することで、近代時間に抗う遊びといってもよいでしょう。

また、「かくれんぼ」では、鬼に見つかった子は捕まり、手を繋いで一列に並び、見つかっていない子が助けに来るのを待ちます。そして、鬼がその場所を離れたとき、まだ見つかっていない子が、捕まった子の誰かにタッチをすると、捕まっていた子は全員解放され、また隠れることができます。つまり、かくれんぼの「リセットボタン」が押されるのです。その瞬間、すべての隠れた子を見つけ出すという未来に向けて、それまでこつこつと捕まえてきた鬼の活動は、元の状態という過去に戻されてしまうのです。まさしく、この可逆性こそがこの遊びの面白さを担保しているといえます。

つまり、遊び時間は近代社会における「不可逆性としての時間」を超えて、「可逆性としての時間」の意味をわれわれに問いかけてきます。

2-3 過去・現在・未来

これまで時間の流れとして捉えてきた過去・現在・未来について考えましょう。

真木氏は、原始社会における可逆性としての時間は、過去は流れ消え去ることなく、常に現在に堆積するものとして捉えられる一方で、近代社会では、時間は不可逆として捉えられることから、過去あるいは瞬時にして過去となる現在すらも、たえずむなしく消え去っていくものとして意識されると言います。それゆえに、そこに生存あるいは人生の意味を見出すことができません。これを真木は「時間のニヒリズム」と呼びました〔真木, 2012〕。

遊びではどうでしょうか。「かくれんぼ」をしていて、鬼が必ず見つけられる保証もなければ、隠れる側が見つからないという保証也没有ありません。また、ここに隠れているのではないかと思って探しに行く途中で、思いもよらないところで見つけることもあります。この偶然性とそれに伴う結果の不確定性こそ、ゴッフマンが言うように遊びの面白さである〔Goffman, 1961=1985〕と言えます。

つまり、遊びの偶然性と不確定性が過去・現在・未来という直線的な連続性を無意味なものにしてしまうのです。

以上のように、「遊ぶための時間がなくなったのではなく、遊びが近代時間に取り込まれただけなのだ！」といえるのではないのでしょうか。

2-4 アクションプラン B：学校時間の新たな構築

そこで、未来の学校の時間について次のような提案をしたいと思います。

① 時間割がない

- ・ 学校に来たらやりたいことを決め、仲間を集めて、必要なら先生を呼んでくることで、時間による学習から解放されます。
- ・ 学校は、学んでほしい枠組みを魅力的に提示することで、ジョブ型雇用に向けての準備をします。

② 学年がない

- ・ 子どもの多様な発育発達によって、学ぶ内容が異なることで、個人に合わせた主体的な学びができます。
- ・ 興味関心がある分野で子どもが先生になることで、深い学びができます。

③ 学びたいときに学ぶ

- ・ 学びたくなるまで仕掛けて待つことで、子どもの時間に合わせて学習が行われます。

- ・ 学び直しができることで、リカレント教育など可逆性の学習ができます。

3. 仲間について

3-1 仲良しって？

「一年生になったら、一年生になったら、友達 100 人できるかな」と、かつて歌っていた歌は歌われなくなりました。そこには、友達を 100 人つくらなければならないという呪縛があるからです。

小学校の教室の黒板の上に「みんな仲良し」という標語が掲げてあります。先生に、「みんな仲良しって、どのような関係ですか」と訊いてみても、残念ながら明確な答えはほとんど返ってきません。

この背景には、子どもたちが集団からはじき出されて、つながりが切れるといじめられるという恐怖感から同調圧力がかかり、「同質的協同性」の集団による「友だち幻想」に縛られているという現状がある〔菅野, 2018〕といわれています。

では、遊び集団における仲間はのでしょうか。

3-2 遊び集団のメカニズム

「かくれんぼするものこの指とまれ」と遊び仲間を集めることから遊びは始まります。このように、特定の目的を果たすべく人為的に形成された集団は、ゲゼルシャフト (Gesellschaft) とよばれます。それは、個人の目的に合わせて選択することが可能な集団で、個人の目的が達成されるまでの一時期とどまる「所属集団 (Membership Group)」です。その集団における目的に合わせて、それぞれの成員の役割が明確化され、しかも成員が毎回変わるので、その状況に合わせて流動的に役割が変化するという性質を有しています。

一方、遊びの場面では、いつも一緒にいる仲間と「かくれんぼ」をしたり、「鬼ごっこ」をしたりと、さまざまな遊びをすることがあります。つまり、仲間は固定されていて、遊びの種類を変えるのです。それは、自分の意思では選択することができない家族集団、地域集団などの血縁や地縁に基づいて自然に成立している集団であるゲマインシャフト (Gemeinschaft) 的集団と捉えることができます。それゆえに、そこでは心情的なつながりが強く、役割も固定的で、ある面離脱することが難しい「帰属集団 (Belonging Group)」なのです。

この集団の違いは、遊びにどのような状況をもたらすでしょうか。そのメカニズムから考えてみましょう。

それぞれの集団は成員に対して、役割とそれに伴う行動規範を内面化しようとしします。しかし、すべての成員が社会化されることは稀であり、役割に不一致が生起し、成員は集団の役割あるいは行動規範に対して逸脱的行為を行うことになります。この行為に対して、集団の対処の仕方は二つあります。

ひとつは、これを逸脱とみなし、成員の役割あるいは行動規範を変えずに再社会化が行使され集団を維持しようとしします。それがうまくいかない場合は、逸脱者とレイベリングして集団から排除するという方法がとられます。つまり、集団の秩序を優先することで、成員は差し替えられるのです。

もうひとつは、既存の役割あるいは行動規範からの逸脱を肯定的に捉え、役割あるいは行動規範を変更し、集団を新たに構造生成していこうとするメカニズムを働かせて、あくまで成員を集団に留めようとしします。

ゲマインシャフト的遊び集団では、成員を排除することによって集団を維持しようとししますが、ゲゼルシャフト的遊び集団においては、役割やルール（行動規範）を変更することによって、成員の存在を維持しようとする傾向にあるといえます。

3-3 遊びにおける意思決定

「縄跳び」で考えてみましょう。跳ぶ子、縄を回す子、見て応援する子など、遊びの中でその子にあった役割が必ずあります。それは、たとえその遊びができない子でも役割があり、SDGs でいうところの誰も取り残さないのです。そして、楽しめない場合は、その役割を変更します。

また、役割を変えるのではなく、遊びのルールを変えることもあります。「鬼ごっこ」では、なかなか捕まらなかったり、逆にすぐにつかまったりしたら、みんなが楽しめないで、逃げる範囲を変えるなどルールを変更します。その決め方は、全員一致が原則です。そのことで、心豊かな（Well-Being）集団を生成する目的から、みんなが納得するルールを構築する体験をします。だから、ルールづくりに参画することで、当事者意識が生まれます。

スポーツという遊びで考えてみましょう。

1992 年の全国高校野球大会で、明徳高校のピッチャーは監督からの指示により、星陵高校の松井秀喜に対して、5 打席連続で敬遠しました。その結果、勝利しましたが、その行為に対して非難が集中したのです。

一方、2015 年のラグビーワールドカップで、日本は強豪南アフリカに逆転勝利しました。それは、終了間際に獲得したペナルティーで、ヘッドコーチからの指示は「同点を狙ってペナルティーゴールの 3 点を獲れ」でした。しかし、選手たちはその指示に従わず、逆転の可能性があるトライの 5 点を狙ってスクラムを選択しました。そして、見事にトライを成功させ、歴史的勝利をもぎとったのです。これは、勝利が歴史的なことだけではなく、ラグビーの世界、あるいはスポーツの世界でこれまでにない意思決定であり、そのことが歴史的であると言えます。当時のヘッドコーチであったエディ・ジョーンズはそう考えました。

つまり、行為の意思決定の主体がどこにあるのかが重要なのです。

2020 年の高校野球は、夏の甲子園がなくなったことから、各地域で大会を催すことにな

りました。その時、北海道奥尻島の奥尻高校は、島の人たちにコロナを持ち込むことは良くないとして参加を辞退したのです。心豊かな（Well-Being）社会の形成から当事者意識をもって話し合い、高校生自身が意思決定をしたことに意味があると思います。

3-3 贈与による共同体の構築

最後に、贈与と遊びについて考えてみましょう。

金沢氏は英国におけるチャリティについて次のように言います。

近代英国におけるチャリティの目的は、国に依存することなく、あくまで地域の自治を前提として、贈与する側と贈与を受ける側の心豊かなつながりを目的とし、「われわれ」意識が自覚される「共同体」の形成にあった〔金澤，2008：253〕と。

遊びは、贈与の行為ではないかと思います。

「かくれんぼ」は隠れる側が鬼のまなざしから消えなければならないと同時に、鬼の居場所を探さなければなりません。一方で、鬼は隠れる側を探すと同時に、隠れる側のまなざしに晒されることにもなります。つまり、見るというのは同時に見られていることでもあるのです。この「見られる私」と「見る私」のまなざしの交叉の中で、どちらともつかない「宙つりの状態」におかれることに、かくれんぼの「まなざし」の愉悦があるのだと西村氏は言います〔西村,1989〕。

それでも、先ほど言ったようにかくれんぼのリセットのために、自分が捕まるかも知れないけれど、仲間を助けるために、まなざしに飛び込む行為に出でます。このことは、一般的には自己犠牲とみられることがありますが、私は共同体を構築するための贈与の行為だと考えます。

では、なぜひとびとは共同体を構築しようとするのでしょうか。

ピアジェは、人間を含む生き物の不変の機能として適応をあげ、その適応の軸に認知の働きを置いて、その発達の展開を新生児のところにまで遡源し、そこから一本の認知発達の流れをたどる。これが子どもの発達の中軸をなすという個から出発して社会性の教育の必要性を説きます。

一方ワロンは、子どもはこの世に生まれ出たとき徹底的に無力であって、他者の共同性を予定せずには生きられない。それゆえ子どもの生の全体性は個体では閉じえず、おのずと共同性を含まざるをえない。つまり赤ちゃんは何によって生きるのかという発想に立つかぎり、他者との共同性を人間の生の本質的契機として想定せざるをえないと考えます。つまり、社会性から出発して、個性の学習の必要性を展開します〔浜田寿美男：1994〕。

このようにワロン理論の視点に立てば、本来的に協働性を求める行為の延長線上に、他者との共同体を構築しようとする贈与の行為があるといえます。

行為の贈与としてのボランティア活動で考えてみましょう。

阪神淡路大震災の避難所に、ボランティアの人が握り飯を持っていきました。それを、被災された人に渡したとき、「こんな冷たい握り飯、食えるか！」と言われました。その

時、そのボランティアの人は、「何を、せっかく持ってきてやったのに」と言って握り飯を地面に叩きつけました。これは、似非ボランティアと言います。本当のボランティアなら「どうしたら、あたためられますか？」と聞きます。つまり、「してやっている」から「させてもらっている」への活動の在り方が、ボランティアという贈与の在り方だと言えそうです。

以上のように、「遊ぶ仲間がいなくなったのではなく、遊び仲間の在り方が変容しただけなのだ！」といえるのではないのでしょうか。

3-4 アクションプラン C ; 学校仲間の新たな構築

そこで、未来の学校の時間について次のような提案をしたいと思います。

① クラスの再編成

- ・ 子どもの学びに合わせてクラスを編成することで、共同体を構築します。
- ・ 子どもにクラスを選択させることで、新たな仲間ができます。

② 子どもによる集団の意思決定をする

- ・ グループ学習による徹底した議論によって、意思決定のプロセスを学びます。
- ・ 学校のルールや学校行事等は子どもたちで決めることで、教師との信頼関係を構築することができます。

③ 見返りのない関係づくり

- ・ 「させてもらう」ボランティア活動をすることで、チャリティ等の利他主義による関係性を学びます。
- ・ 本来の共同性を引き出す場を用意することで、忖度のない関係性を構築します。

おわりに

すでに、これまで述べてきたいような学校改革の萌芽が見られます。

京都府の南山城小学校の地域学校運営員会では、児童も委員として会議に出席する画期的な試みをしています。

その会議で児童の意見は、「通知表がなければ楽しいな。だって、いい成績をとるために勉強するのって楽しくない」、「一日、何をするかを自分で決められたら楽しい」、「授業、先生、給食を自分で選択できる学校なら楽しい」、「もっと、学外の地域で学びたい」、「もっと先生と話せたら楽しい」などなど、授業、学校生活、先生などについてのこれからの学校の在り方を示唆します。

また、全国に 17 校の不登校特例校がありますが、その中のひとつ「岐阜市立草潤中学校（2021 年開校）」では、次のような試みをしています。

「すべての授業はオンラインも併用のため通学してもしなくても OK」

「担任教師は生徒側の選択制」

「その日の時間割は教師と生徒が相談しながら一緒に決める」

「成績表の形式は生徒・保護者が決める」

「職員室・校長室は生徒に開放する」

「制服や給食はなく、部活や行事もない」

以上のように、コロナ禍をきっかけとして、すでに学校教育では、空間、時間、仲間に関して、新しい在り方を模索し始めています。学校に行かない子が小中学校で 24 万人（2021 年度）となった今、学校の構造自体を遊びによって相対化し、子どもたちが行きたがる学校に生まれ変わるチャンスを迎えていると言えるのではないのでしょうか。

<文献>

仙田満, 1984, 『こどものあそび環境』, 筑摩書房

Goffman, Erving, 1974, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Harvard University Press.

Goffman, Erving, 1961, *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, Bobbs-Merrill. (佐藤毅・折橋徹訳, 1985, 『ゴッフマンの社会学 2 出会い—相互行為の社会学—』, 誠信書房)

西村清和, 1989, 『遊びの現象学』, 勁草書房.

真木悠介, 2012, 『定本 真木悠介著作集 II 時間の比較社会学』, 岩波書店

菅野仁, 2018, 『友だち幻想—人と人のくつなぎ—を考える』, ちくまプリマー新書

金澤周作, 2008, 『チャリティとイギリス近代』, 京都大学学術出版会.

浜田寿美男, 1994, 『ピアジェとワロン』 ミネルヴァ書房

※本稿は、「遊びにおける『つながり』が相対化する社会—空間・時間・仲間を地図として—」（スポーツ社会学研究第 30 巻第 2 号、2022 年）をベースに、学校教育を相対化するために書き換えたものである。

《市橋公也（会員・宇治黄檗学園校長）のコメント》

杉本先生のお話を聞いて、まず、楽しいなと思いました。遊びというと、保育や幼児教育のキーワードという感覚だったのですが、知的好奇心を育て膨らませ、社会性育成に寄与しているすごい文化なのだと率直に思いました。

アクションプラン A にひっかけながらお話したいと思います。アクションプラン A の例で学校空間の新たな構築というお話がありました。ご紹介いただいたように、(宇治黄檗学園では) コミュニティスクールを導入して歩み始めたところなのですが、絵に描いた餅に終わらないように、学校、家庭、地域で、同じスタンスで子どもたちに視線を送ることが大事だなと思っています。学習のボランティアなどで手を挙げてくれる方が多くなりま

した。将来的に、学習ボランティア、学校に貢献することがリタイア層にとってこの上ないステータスになるような社会が来たらうれしいと思います。

それからアクションプラン B についてです。今、うちの小学校・中学校では PBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）に取り組んでいます。どうしても学習指導要領や教科書に縛られがちの中で、総合的な学習の時間などを中心にしながら、子どもたち自身が課題を設定して、それを自分たちで調べ、アウトプットする前にしっかりとブラッシュアップを繰り返す。場合によっては時間割の変更でまとめ取りも可能ということで、今、我々が現場で与えられている中で、一番自由が効く領域ではないかなと思います。義務教育の後の高校でも、教科書を見ますと、何々探究などという教科書が多いのです。教科につながって、20 歳前後の日本の子どもたちの真の学びの姿に繋がっていく。国際的に弱いといわれているその辺りを、本当に自信を持って生きていけるように何とか後押ししたいと思っています。過去に外国の方に聞いた話で、日本の子どもたちは、低学年の子どもたちほど「はい、はい」とよく挙手をするが、思春期になると挙手をしなくなる。それに対して、そちらの国では、低学年のときには、何をどうアピールしていいのかわからないから割と静かなのだけど、だんだんと自主的に自分が発言したくなるという時期に入り、思春期を迎えると、どんどん教師に質問をするようになるという面白い話を聞きました。日本の教育の弱さなのかなというふうにも思っています。

時間割の話もそうなのですが、うちは小学校と中学校で2種類のチャイムを使い分けていますが、これを全くなしにしても、きっと子どもたちはとてもコントロールができるのではないかなと思ひまして、ぜひチャイムのない学校を目指してみたいです。また、部分的には、家庭学習を中心に「宿題はこれですよ」ではなくて、子どもたちが学習計画を作る。できれば、将来的には授業も子どもたちが作る計画で進められたら一番いいのではないかと考えました。

最後にアクションプランの C ですが、ここで私が着目したのは子どもによる集団の意思決定をするというところです。私が 20 代の頃、体育の授業で球技をするときに、子どもたちにルールから作らせるような授業を仕組んだことがありました。導入段階で、ルールなしで、バスケットボールもどき、サッカーもどきに取り組ませる。その中で、子どもたちの困り感の中から、自らがルールを作っていく。学習の振り返りではあるのですが、先ほどお聞きした遊びの文化と相通ずるものがあるのではないかなというふうな感想を持ちました。未来の学校で子どもたちに身につけてほしいなと思ったのは、自由に考えて表現する力であったり、コミュニケーションの手法であったり、調査研究の方法、それから、先ほどありました自主管理の姿勢です。もっと言ったら自主カリキュラムの編成です。そして何よりも集団として集まるわけですから、協力の仕方を学んで生涯学習に繋がっていったらいいなと思っています。

反省として、これだけをお伝えしたいのです。小 1 プロブレムという言葉があります。幼保を卒園して学校に入った子どもたちが「園はいいな、園に帰りたい」ということを、

4月に口にしたことがありました。お話を聞いていて学校を軍隊のように感じているのかなと思いました。我々は入学前に保護者や幼稚園や保育所の先生に「少なくとも座席に座れるような状態にしてください」とか、「自分の名前くらいはひらがなで書けるようにしてください」と言いますが、こんなことを発信している自分たちも情けないなど。真っ白い子どもたちを迎えて、そこからクリエイトしていくことも本当は大事なのではないかと思います。今、学校はコロナ禍でいろいろなことが制限されるような日々が続いていますが、工夫次第ではいろいろなチャレンジやアレンジ、そしてチェンジができるのではないかと思います。

《小川健一郎（会員・大阪 YMCA 総主事）のコメント》

遊びということについてこれだけ積極的に深く考えるということが、私は今までなかったなと思います。遊びというと対で出てくるのが勉強です。「勉強しなさい。遊びはその後で」と。このストーリーが長い間、あったのだろうなと思います。

私は教育に携わっていますが、実は教育学は勉強していません。マネジメントの勉強をしてきており、組織の運営・経営が専門です。教育については、少し素人っぽいところがあるかもしれませんが、ご容赦いただけたらと思います。

例えばねじで「遊び」という言葉があります。組織を運営することを考えたときにぴったりとくっつけてしまうと機能しないことがあります。ですから、物を作るときには、必ず遊びを意図的に作って、それで完成させるという考え方があります。だから、子どもと向き合うときにぴったりとカリキュラムを組んでいては、子どもの場所がない。YMCAでは、学校のみならず、キャンプやプログラムのときに、子どもの時間を作るということを考えてながら行っています。

今日のお話の中でいくつか心に刺さるところがありました。遊びにおける過去・現在・未来というお話をしていただいたかと思うのですが、直線的な連続性を無意味なものにするというような、そういうお話があったかと思います。大阪 YMCA では直線的に小学校・中学校・高校というふうに上がってくることができなかつたり、不登校で学校に通えなくなった子どもたちの通信制の高校だったり、特別なクラスを運営しています。最初、私は、やはり普通の学校に戻すのがいいかなと思ったこともありますが、今はそうではないなと思っています。

大阪 YMCA は国際学科という学科があります。そこが実は先ほど少しご紹介いただきましたけれども、デンマークのエフタスコレというところと生徒の交流を行っています。今年1月に私は初めてデンマークに行って、その学校に行きました。先ほどの直線的ではなくて、一度立ち止まるということをしてデンマークの国として行っているというのを目の当たりにしました。少しだけ説明させていただきます。高校に進学する前の14歳から15歳の生徒が対象になっているのですが、高校に入学する前の全寮制の学校です。この学校は成績がつかない。先ほど生徒が「成績がつかなかったら勉強できるのに」とい

うお話がありました。成績がつかない全寮制の1年間の学校の目的は何かというと、自分とは一体何者か、社会と自分とはどういう関係があるのかということを実体験や興味関心のある分野で学ぶということなのです。国レベルの話では、今、デンマークにエフタスコーレは260校あるそうで、14歳から15歳の子どものうち、約30%の人が通っているそうです。不登校だけではなく、将来、ある意味でエリートになっていく人たちも自分のその人生の中で1年間を費やしているということです。

エフタスコーレの学校それぞれに特徴があり、うちはスポーツばかりやるのだとか、うちは国際交流するのだとか、そういうのがあって、国際交流をやりたいというところと大阪YMCAは繋がっていて行き来をしています。自分の自由な時間、遊びの時間があるということがポイントなのだろうなと私は思っています。こういう教育を受けた人は必ずしもこうなるというわけではないですけども、デンマークの人たちは議論が好きで、自分たちの考えをしっかりと話をする人が多いと言われています。今年7月に行ったときに、14歳15歳の人たちが、なぜ、今、世界中の人たちが人道支援としてウクライナ支援をするのかを私達は考えた方がいいと議論していたそうです。「アフガニスタンのときにみんな支援したか」、「結局、ウクライナは白人の国だからだからみんな支援するのではないか」と若い人たちの議論がありました。

私達が民主的な社会を作るということを考えたときに、今日のお話のところに行きますと、遊びであつたり、自分で自分の時間を見つけ出したり、その中で自分の考えが育まれるってということが大事なのだろうなというふうに思いました。

《第 20 回セミナー》

古典をいただき 古典に抱かれて

ー古典ってなんだろう？ー

山本壯太（「古典の日推進委員会」アドバイザー）

はじめに

ご紹介いただきました山本と申します。今日は短い時間ではありますが、古典って一体何だろうということを皆さんと一緒に考えてみたいと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。

「古典をいただき 古典に抱かれて～古典って何だろう？～」というのは本日のタイトルですけれども、僕らの世代では古典というと面倒くさい文法教育が思い出されます。係り結びでありますとか、変格活用でありますとか、文法優先の受験教育の悪しきサンプルみたいな世代でした。現在、学校ではどのような古典が教えられているのかということですが、周りにいらっしゃる教育の専門家に伺いますと、あまり状況は変わっていないようです。例えば、京都の和歌の家の冷泉貴実子さんによると、国文学を志望する学生がどんどん減少し続けているという状況のようです。

今日のタイトルの「古典をいただき 古典に抱かれて」というのは亡くなられた秋山虔東大名誉教授の言葉です。これはもう名言だと思います。文字通り、私達は古典を胸にいだいているということですが、しかし同時に、実は私達人類、人間というのはその英知の結晶である古典に温かく抱かれているのですよという秋山先生の温かい人柄がにじみ出て、古典の意味を伝えているのではないかと思います。現代の私達にとって、古典っていったいどういう意味なのか。特に次世代の子どもたちにどのような古典教育で古典の意味をどういうふうに伝えていけばいいのかということを皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

古典の日を皆さんはご存知でしょうか。多分知らない人の方が多いと思いますが、実は 11 月 1 日が古典の日で、古典の日に関する法律で定められた古典の記念日なのです。なぜ、11 月 1 日が古典の日になったのかというと、13 年前の 2008 年ですが、11 月 1 日に源氏物語千年紀の式典というのが開かれました。源氏物語千年紀とは、ということかと言いますと、文字通り 1000 年前の 1008 年の 11 月 1 日、霜月 1 日、源氏物語の作家の紫式部が日記を書いておりまして、紫式部日記といえます。

それを、絵巻物にしたのがこれなのです。



鎌倉時代の初期に書かれたもので五島美術館の国宝になっておりますけれども、これは実は、1008年（寛弘5年）という年で、その年の11月1日の宮中の模様が描かれています。皆さ

ん酒盛りをして結構酔っ払っているようですが、これは何の日かといいますと、紫式部が仕えていた当時の一条天皇のお妃の彰子さんに皇子が生まれました。後の後一条です。

この誕生の50日の記念日の余興であるというふうに言われております。何人かのお公家さんが写っておりますけれど、右の方に小手をかざして中を覗いている男がいますが、これが有名な藤原公任です。当時のナンバーでいうと第7位の高貴な貴族ですが、何よりも公任といいますと、歌人として有名ですね。百人一首の「滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ」という有名な歌を詠んだ歌人でもあるのですが、その彼が覗き込みながらこう言ったということが式部の日記に書いてあるのです。

「このわたりには若紫やさぶらふ」このあたりに若紫さんはいらっしゃいますかというふうに問いかけたというのです。それを中で聞いていた作者の紫式部は、男たちの中に光源氏らしき人もいないのに若紫さんはいませんよ、というふうに思って無視をしたというふうな日記が書かれていて、つまり日記のこの日付が源氏物語というのがこの世に実存したことの最初の証明にあたる日なのです。それが寛弘の1008年の11月1日だったということで、それを記念して1000年後の2008年の11月1日に「源氏物語千年紀」というものが京都で開かれました。当時の天皇、皇后、今の上皇、上皇后もご出席なされて盛大に開かれたわけですが、このときに「古典の日宣言」という文章が読み上げられました。

古典の日宣言

柴本幸さんという女優さんが、彼女が初めてこの宣言文を読み上げました。この宣言文が、古典っていったい何なのかということを実に明快に見事な言葉で描き出しています。それから5年後に古典の日朗読コンテストで優秀な成績を取った伊東知穂さんという当時、中学3年生の子が読んだ録音がございます。これを聞いていただけるといったい古典って何かということが非常に明快に語られていると思います。

「古典の日宣言。源氏物語は日本の古典であり、世界の古典である。（中略）古典とは何

か。風土と歴史に根ざしながら、時と所をこえてひろく享受されるもの。人間の叡智の結晶であり、人間性洞察の力とその表現の美しさによって、私たちの想いを深くし、心を豊かにしてくれるもの。いまでも私達の魂を揺さぶり、『人間とは何か、生きるとは何か』との永遠の問いに立ち返らせてくれるもの。それが古典である。揺れ動く世界のうちにあるからこそ、私たちは、いま古典を学び、これをしっかりと心に抱き、これを私たちのよりどころとして世界の人々とさらに深く心を通わせよう。そのための新たな一歩を踏み出すことを源氏物語千年紀にあたって、私たちはここに決意する。紫のゆかりふたたび…」

これは僕も関与したのですが、古典っていったい何かということが参考書にはいろいろ書いてありますけれども、これほどの確に訴えかけた文章はないのではないかと思います。この千年紀の宣言文を作ったときに中心になった呼びかけ人の先生方は、千玄室さん、秋山虔さん、梅原猛さん、瀬戸内寂聴さん、ドナルド・キーンさん、芳賀徹さん、村井康彦さん、冷泉貴実子さんという超一級の文化人の皆さんでした。もう既にこの中の 5 人の方が鬼籍に入られましたけれども、これは、芳賀徹東大名誉教授が中心になって作られた文章であります。いろいろな印象的な言葉がちりばめられていますけれども「人間とは何か、生きるとは何か その永遠の問いに立ち返らせてくれるもの」というふうなことや、特に今のウクライナ情勢も含めて、「揺れ動く世界のうちにあるからこそ」というふうな文言や、まさに呼びかけ人の先生方が現代の我々に残していった一つのメッセージと受け止めています。私ども古典の日推進委員会は、この源氏物語千年紀を受け継いで翌年の 2009 年に出発しました。この古典の日宣言をいろいろな意味での理念中心的な役割も担った私どものバックボーンというふうに考えております。

古典の日に関する法律 古典の日推進の実行指針となる

これを受けて、どういうふうにこの理念を実現していくのかというところで、少し現実的な形で具現化したのが古典の日に関する法律です。これは平成 24(2012)年の 9 月 5 日に公布されたもので、当時の国会で、全会一致で議決されました。法律そのものは「目的」「定義」「古典の日の設置」という 3 条から成り立っています。目的については古典を活用しましょうというふうなことですけれども、その中で定義というところがありますので、それをちょっと見てみます。古典の日宣言で書かれた理念的な文言が、この定義においては現実的な側面で裏付けがなされているということで、参考になるとと思います。

「この法律において「古典」とは、文学、音楽、美術、演劇、伝統芸能、演芸、生活文化その他の文化芸術、学術又は思想の分野における古来の文化的所産であつて、我が国において創造され、又は継承され、国民に多くの恵沢をもたらすものとして、優れた価値を有すると認められるに至ったものをいう」

11月1日は古典の日

私達は以来10年、古典の日を推進するために動いています。その基本的な、現実的な定義の中で一つユニークなのは、これは文化庁の方向と一致しているのですけれども、古典というのは源氏物語のような高等なものだけではなく、高等というのは変ですけれども、一般の社会生活、つまりお祭りや、生活文化、お茶お花も含めて、そういうものにも古典が立派に残されているのですよということが定められています。記念になるような方丈記だとか、琳派四百年、源氏物語千年紀が一番大きかったわけですが、その辺をやってきました。2020年には文化基金賞というものを創設したということもございます。

古典の日推進委員会の活動

例年、フォーラムでありますとか、朗読コンテスト、街角古典カフェなどを中心に活動しています。朗読コンテストについては、後ほどまたお話しますが、非常に有意義なものではないかと思っております。古典の日フォーラムは11月1日の古典の日に式典的な要素も兼ねてやっています。街角古典カフェはパリのカルチュラタンの喫茶店で、大学の先生と生徒たちが親しくお話をするという雰囲気、少人数で語り合っていこうという粋なものであります。そういうものを毎年続けております。

古典の日 333 拍子

古典の日推進委員会の中核的な考え方ですけれども、333拍子というふうに我々は言っています。

○3つの分野

中核は源氏物語も含めた「文学の思想」、それから、お能や狂言も含めた「伝統芸能・音楽」、三つ目が「美術・生活文化」で、これが古典の範囲を広げるという意味合いで大事だと思うのです。お茶やお花、それから地方のお祭り・祭礼などの伝統的な行事です。

○3つの活動

「研究」「普及」「啓発」です。啓発に込められている意味合いは、次世代、若い世代、小学生、中学生や高校生の子どもたちにどうやって、日本の我々の文化の宝である古典を伝えていくかということです。

○3つの目標

「古典の日の更なる全国展開」というのは、京都や奈良などの古い地域だけではなくて全国に優れた古典伝統文化というものがあるので、そのあたりを皆さんに意識していただきたい。「親しみやすい古典 古典は全国に」というのは、祭礼でありますとか、それぞれの地域に密着した伝統文化を知っていただきたいということです。「次世代への継承」は、先ほど申しました次の世代の子どもたちに伝統文化の優れたところを見つけさせていきたい。

「日本人としての誇りを身につけさせたい」(故 秋山虔東大名誉教授)。それが先ほどの古典をいただき、古典に抱かれてという秋山先生の志でもあります。

次世代を担う若者たちを応援

ここ数年、特に私達が力を入れているのが、若者支援と若者に日本の文化の誇りを知っていただきたいということで、古典の日文化基金賞に「未来賞」を新設いたしました。これは小中高の子どもたち、大学生、および若い世代で伝統芸能、あるいは伝統工芸などに一生懸命に打ち込んでいる若者たちを励ますための賞で、先ほどの3つの活動で言えば「啓発」です。奨励の意味を込めて賞を創りました。今年は第1回だったのですが、3つのグループに「未来賞」を差上げました。

一つ目が宇治っ子朗読劇団☆Genji です。これは宇治十帖です。小中高校生が衣装を着まして源氏物語のあるストーリーの一節を役割分担しながら読み合わせしていくという朗読劇といわれているスタイルです。子どもたちが中心になって活動しているということでございます。宇治市だけではなく、周辺の自治体にも呼ばれて活発な活動を10年以上続けているというグループです。

二つ目は京都府立鳥羽高等学校の披講研究部です。これも写真を見ていただければわかりますように、当時は和歌をこういう形で独特の抑揚をつけて朗唱をしたのです。それを披講というのですが、京都の冷泉家がその披講の伝統をずっと守っています。宮内庁皇室のお正月の歌会始を想像していただければいいのではないかと思います。鳥羽高等学校では高校生が自分たちで詠んだ歌をこういうふうに着装をつけて、それで独自の方法、朗唱の仕方披露するという活動を十数年にわたって続けています。

宇治っ子朗読劇団☆Genji



京都府立鳥羽高等学校の披講研究部



三つ目は津屋崎臨海学校実行委員会です。福岡県の福岡市の外れにとっても風光明媚な海岸があって、津屋崎海岸というそうです。福岡教育大学の学生たちが、自らの手でカリキュラムを組んでお金を集めて、地域の中学生に短歌、和歌を中心にした合宿を毎年やっています。特徴の一つは子どもたちが短歌を詠むということで期間中に五百首ぐらいの短歌が集まるそうです。子どもたち



の情感というものを短歌という形式で素直に見せていくということで、福岡教育大学の学生中心に30年間、活動が続けてきています。普通は2泊3日でやっているのですが、ここ、2,3年はコロナで1泊に圧縮してやらざるを得なかったということがあるようですが、それでもなおかつ頑張って続けているということです。それぞれ賞金は30万円で、今後の奨学金的に使っていただくということで表彰いたしました。

子供たちへの古典教育（提言）

私自身、源氏物語千年紀以来、こういう古典の普及活動に携わってきまして、特に若い世代にどういうふうにして、どうやって日本の古典文化の良さを引き継いでもらうのかということをやっているわけですが、必ずしもまだまだ十分ではないと考えています。それでは、今後どういうふうの方法を考えていけばいいのかということです。

○文法中心の受験教育の見直し

最初に言いましたように、文法中心の受験教育の見直し。これが続く限り、やっぱり入り口のところで子どもたちがリタイアしてしまう。私も嫌でしたから。これをどういうふうに関後考えていくのか。これは非常に難しい問題で、我々がすぐ手をつけることもできないと思いますけれども非常に大事なことだと思います。先生方も皆さん、それを指摘されていると思います。

○古典的方法と現代的方法の併用

それでは古典の日推進委員会、あるいは身近な先生方も含めてどういうことが次の世代に古典を親しんでもらう方法としてあるのだろうか。できそうな実践的な部分で一、二、お話をさせていただきます。古典の学習方法というのは文字通り古典的な方法と、現代的な方法があると思います。

古典的な方法というのは、江戸以来、声に出して論語を朗唱し、子どもたちがどこまでわかっているのかというのは別にして、体に叩き込んでいくというふうなことです。これは野蛮にみえて非常に有効なことで、後々意味はついてくると考えられます。これを今、非常に文字通り実践されている先生が安田登さんという能楽師です。彼は能楽師なのですが、体でもって動き、そして声に出して、お能あるいは狂言、論語の場合もそうですけれども、それがいかに大事かと。黙読ではなくて体ごと体得していくことは非常に有効であって、世代に応じて自然に意味がついてくると。聞くところによると中国では今でも小学校に上がると同時に論語を暗唱するというふうなことがなされているようです。

最初にちょっと申し上げましたが、これを我々として実践してやっているのが古典の日の朗読コンテストです。毎年1回、テーマを定めて古典文学に特化した朗読大会、朗読のコンテストをやっています。今年は14回目で何を読ませたかということと「古今和歌集仮名序」、それから「平家物語の忠教都落」の平忠教が藤原俊成に歌を託して別れていくというくだり、それから『徒然草』の有名な花は盛りに、というふうな和歌をテーマにした3つの古典の中から読んでもらうということで実施いたしました。

これは文字通り、声を出して古典文学を読むということで、考えてみれば当然ですけども、源氏物語の時代に活字はないわけですから、実は宮中でも朗読の上手な子がみんなに読んで聞かせるというふうなことでやってきたのではないかというふうに思います。そういうことで声に出して読む、体で読む、体で動くというふうなことを、私は勝手に古典的な教育と言っています。今後ともやっていっていいのではないかなと思います。

それからもう一つは、現代的な古典教育ということで、古典の現代語訳、アニメ・漫画なども活用して、とにかく子どもたちに古典に親しみやすく紹介する。これは江戸時代にはなかった一つの方法ですね。古典を扱った様々な名作漫画やアニメもあります。方法論を問わずに親しみやすい入り口を作るといことです。特に現代語訳も非常に大事で、源氏物語といえば、明治の与謝野晶子から始まって谷崎潤一郎、最近の角田光代さんに至るまで、現代語訳の名作、名訳が生まれております。そういう現代語訳によって入り口を広げて親しむことを進めていくというのは非常に大事なことだと思います。

すごく印象的なお話を彬子女王殿下からお聞きしました。私どもの古典の日を非常に支援していただいているのが彬子女王殿下で、若い頃にイギリスに留学し、英語漬けの毎日の中で日本の古典、日本の文字、日本の言葉を読むことがいかに嬉しかったかというふうなことをおっしゃっておりまして、英国留学中に源氏物語を読んだとおっしゃっていました。その彬子女王殿下がおっしゃるのは、ここに書かれておりますように、とにかく入り口を広げてあげなさいということでした。最初から原文を読みなさいということではなく、入りやすい方法で親しみやすく紹介することが大事ですよ、というふうにおっしゃっています。

特に私が痛感するのは現代語訳という部分なのですが、与謝野晶子が、谷崎が、ということもさることながら、できれば、お父さん、お母さんが自分たちの言葉で、子どもたちに古典の面白さみたいなものを訳してあげられないかなと。そこまでいくと大変素晴らしいことだと思うのです。できないかという、僕はできると思うのです。誰でも、我々の世代も、今もそうでしょうけれども、古典文学の入り口の一つで、一番、誰でも親しんでいるのが百人一首ですね。今のご家庭にどれぐらいあるのかちょっとわかりませんが、坊主めくりという遊びからスタートして、和歌・古典の入り口に一番近かったと思います。その辺のところは私のようなものでも、子どもたちとかるた取りをやりながらこれはこんな歌なのだよ、というぐらいのことはできたと思うのです。1人1人が優れた翻訳家というふうなことになると素晴らしいなと思います。テレビもあります。おすすめしたいのは100分de名著というNHKのETVでやっている番組です。毎回25分の4回連続で、一つの作品をテレビ的な手法を駆使して東西の古典をわかりやすく見せています。これなんかはやはり子どもたちに何とかを見せて入り口にしてあげたらと思います。

○日本人の文学的発明の最大のものである短詩系の俳句、和歌、短歌を教育に広く取り入れることを提案

それから、先ほど言いましたけれども、短詩系の俳句、短歌、和歌は、日本人が発明した文学の非常に優れた遺産だと思います。特に俳句は小学生でも十分詠めます。中学生になる

と短歌もできます。

短い文章の中にいろんな愛憎、感じを込めていく短詩系というのは、日本独自の文化文学の一つの系譜を築いていると思いますので、この辺のところもご家庭も含めて活用していくといいのではないかなというふうな気がいたします。

○受験文法教育を排し、入り口を選ばず、柔軟に洋の東西の古典文学の「中身の面白さ・人間とは何か」「誇るべき日本の古典」に気づかせること

目的はおもしろさですよ。人間って何ですか、この永遠のテーマみたいなものに、やさしく導入して気づかせてあげるということが、理想論ですけども、大事なことなのではないかなという気がいたします。古典の日推進委員会というものを運営しつつ、日本文化、日本文化だけではなくて、古典は当然、洋の東西を問わずということですからヨーロッパの古典も含めて伝統文化を勉強し続けていきたいというふうに思っています。

古典についての推薦本が三冊ありますのでご紹介させていただきます。

『野の古典』（安田登著）

先ほどお話しましたように安田登先生っていうお能のワキ型の方です。彼は中国文学の研究者でもあるのですが、非常に幅広く日本の古典をわかりやすく解説して、野の古典と言っているように在野でも面白いものがいっぱいある、源氏物語だけじゃありませんよと。ちょっと俗っぽいところがあるところもあるのですが、これはぜひおすすめの1冊です。うちの古典の日推進委員会でも来ていただいて、お話をさせていただきました。

『文明としての徳川日本』（芳賀徹著）

これは少し骨が折れるかもしれませんが、私どもの呼びかけ人の1人の芳賀徹先生の書いた本です。蕪村でありますとか、琳派でありますとか、芭蕉でありますとか江戸時代のを扱っています。江戸時代というのは鎖国で、文化の果てる時代だったというのが通念だったのですが、これは全くそれを真っ向から否定しておりまして、徳川300年の中で蓄積した独自の文化が明治以降一気に日本が文明開化の世界に入っていく蓄積、土壌を作ってきたのだということを非常に実証的に描かれた本です。今やこの本も間もなく古典入りするのではないかなと思うくらいです。徳川時代っていったい何と、文化が果てる時代でもなかったのよ、という大変良い本です。

『源氏物語』（角田光代訳）

先ほどお話しましたが、これが角田光代さんという小説家による源氏物語の現代語訳です。3冊の本からなっています。角田さんのこの1冊がどのというよりも、私が言いたいのは、有名な池澤夏樹さん編集の日本文学全集という本が出ているのです。これは全30巻で、古事記から始まって現代の小説まであり、15巻ぐらいまでがいわゆる古典を扱っています。例えば古事記は池澤さんご自身で、源氏物語を角田さん、文学者を中心にしたいろいろな方

たちが古典の現代語訳に取り組んでいます。この中からお好きなものを読んでみていただくと、本当に古典の面白さというのが、ぱあっと目が開けるような感じです。ちょっと書店の宣伝みたいになってしまいました。河出書房新社から出ています。

《速水 徹（主席研究員／立命館大学客員教授）のコメント》

山本さん、大変貴重なお話をありがとうございました。秋の1日、大変勉強になりました。古典とは「人間とは何か、生きるとは何か」との永遠の問いに立ち返らせてくれるものだ、というお言葉が特に心に残りました。その一方で、古典が本当の意味で現代人の中に深くは浸透していないことも改めて感じました。

山本さんがおっしゃっておられたように、「古典」という言葉を聴いたり、目にしたりすると、まずは反射的に高校などでの「古典の授業」というものを連想してしまう人が非常に多いと思います。そして、「文法が苦痛で面白くなかった」という感想が、確かに先に立ちます。私自身もそうでした。

しかし、冷静に考えてみますと、古典、つまりは古い時代のものが私たちは嫌いか、と問われますと、決してそんなことはないと思います。それこそ、山本さんがNHKにおいでだった時に手掛けられた大河ドラマなどは、古い時代そのものが常にテーマです。山本さんのお話の中で、現代語訳をうまく役立てたいというお話がありました。ここに関連してですが、伊藤鉄也先生という方が代表を務めておられる研究「海外における平安文学及び多言語翻訳に関する研究」（2017年度基盤研究）をベースにした「海外平安文学情報」というサイトを拝見しますと、おびただしい研究の成果が掲載されています。

このサイトで「源氏物語」が現代語訳されたものがいつから、いったいどれくらいあるだろう、と調べてみますと、明治23年、1890年の「新編紫史：一名・通俗源氏物語巻1」という1冊に始まり、与謝野晶子、谷崎潤一郎といったよく知られるお名前も出てきて、トータルで148件ありました。ただし、これはホームページで現在、アップされているもののみで、明治から戦前までで148件ある、ということです。

この148件には入ってきませんが、大正、昭和の時代にも、円地文子や田辺聖子、橋本治、瀬戸内寂聴、大塚ひかり、林望、そして最近でも角田光代といった作家の方々が現代語訳を刊行しています。

源氏物語は一千年の時空を超えて読み継がれているものですが、現代語訳に限っても、すでに130年ほどの歴史がすでにある、ということになります。

そして、今度は、どれくらいの言語に訳されているかを調べてみますと、33ありました。英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、韓国語、リトアニア語、タミル語などです。世界中で日本の古典がこれだけ様々な言語に訳されて読まれている、と知って非常に驚きました。まさに、山本さんのご発表の中にあった、古典の日フォーラムでの、当時中学生の伊東さんが朗読された「古典の日宣言」にあった『源氏物語』は日本の古典であり、世界の古典である」というお言葉を実感しました。

古典文学、特に和歌文学を研究していらっしゃるフェリス女学院大学教授の谷知子さんが「古典のすすめ」（角川選書、2017）という本で、こう書いておられます。

「人間は他の動物と違って、名前を持つこと、理想や美という概念を持つこと、旅や祝祭というハレのときを持つこと、自然や日本ということについて思考することといった、文化的な行動をする存在です。こういう思考や概念があるから、人は人たりうるのです。こうした人生の重要な出来事や思考について、日本の古典文学は長い間知恵と力を読者に与え続けてきました。なぜ古典を学ぶのかと聞かれたら、私はよりよく生きるためと答えるでしょう。そして、いつの時代にあっても普遍的な力を持つからこそ、古典と呼ばれるのです」（p.6）

非常に分かりやすい言葉で古典の魅力を説明しておられるのではないかと思います。この「よりよく生きるため」というお言葉が、まさに、古典の素晴らしさって何だろう、なぜ学ぶのだろう、ということを考える上でのキーワードではないかと感じました。

さて、少し俯瞰的な、クリティカルな視点で、では、なぜ、そのような人生を豊かにしてくれるはずの古典と、「古典ざらい」に代表されるような距離感というものが生まれてしまったのか、ということを考えてみました。それは、教育における古典の立ち位置にあるのではないかと思うのです。

「なぜ古典を勉強するのか」（文学通信、2018）という本があります。明星大学教授の前田雅之さんという古典学を専門とされる先生の本ですが、この本の結びのところで、前田先生はこう書いておられます。

「ヨーロッパでは第二次大戦後に大学に工学部ができたが、明治十九年（1886）に帝国大学工科大学（現、東京大学工学部）として設立したのが明治日本である。技術テクノロジー（工学）と法学が近代日本の知の標準であり、それに成績重視主義が連結したら、古典などはせいぜい修養主義（親鸞や禅語録など）の一つになるか、暇つぶしになるしかない。大概は無視されるだけである。せめて旧制高校の教養主義に日本古典が入っていればよいだろうが、デカンショと『源氏物語』が共存することは想像することもできない。古典・国語教師や研究者が社会的影響力を行使するのは、中等学校の教科書か前述したように参考書・問題集だろう。いずれも受験と結びついたある意味で「不純」なものであった。」（p.326・p.327）この1文に、ヒントがあるように感じます。日本が明治の時代に、近代日本として変化を遂げていこうとする過程で、「知の標準」というものが技術テクノロジーと法学になった、そして、これに旧制学校・東大法学部や陸海軍学校の異常なまでの成績重視主義がつながったために、古典は隅に押しやられた、というのが前田先生の見立てです。

ここからは山本さんへのご質問になりますが、では、谷知子先生がおっしゃるように、古典は「よりよく生きるため」に必要な存在である、その一方で、前田雅之先生が言われるように、古典・国語教師や研究者が社会的影響力を行使するのは教科書か参考書・問題集で、いずれも受験と結びついたある意味「不純」なものである、という現状があります。「古典の日に関する法律」の制定から今年でちょうど10年の節目ですが、こうした現状を踏まえて、では、これからの教育の中で、古典というものに対して、子どもたちにどのような方向

性、あるいはどのような教え方というものを日本の教育界はしていったらいいのか。これは、相当に悩ましい課題だと感じます。

今日のお話で、山本さんから「文法中心の古文の受験教育の見直し」「古典的方法と現代的方法の併用」というご提言があり、日本の文学的発明である俳句、和歌、短歌を教育に広く取り入れる、あるいは受験文法教育を排し、入口を選ばず、柔軟に洋の東西の古典文学の中身の面白さ、人間とは何か、あるいは日本の古典が誇るべきものであるという点を気づかせること、というご提案がありましたが、一方で、受験教育というものは厳然としてあり、これらのご提案を実際に、今の教育界に落とし込んでいくのは相当な困難を伴うと思います。その点、どんな具体的な方策があり得るでしょうか。

あと、「啓発古典の日のさらなる全国展開」というお話もありましたが、具体的にはどのように全国へと広げていかれるのか。あるいは古典の日の3つの活動である「研究・普及・啓発」について、ここまでの10年ほどを踏まえ、例えば次の10年のスパンでどのような戦略をお考えでしょうか。

《山本壯太（「古典の日推進委員会」アドバイザー）の返答》

まず答えやすい方から先に言わせていただくと、全国展開についてですが、一つ目の子どもの教育と関連して、進めてきたわけですが、全く十分に行っていると理解しておりません。ご説明申し上げますと、古典の日推進委員会という組織の問題ですね。これは源氏物語千年紀のときに京都府、京都市、京都を中心に自治体と民間とで結成したもののなのです。その後の4年間で、国にお願いして、一応、法律になったのですが、活動の母体というのが、やっぱり京都という地方の一つの団体にしか過ぎないですね。京都府下あるいは京都の周辺については力が及ぶとしても、全国にまで持っていくというのは、なかなか制度やシステムのいっても難しいわけです。

まずは京都府、京都市がお金を出しているわけですから、京都府・市以外のところで何かやる時に、そのお金はどういう性格でということが問われてきて、例えば、東京で全国展開やりたくてもできないというふうな自主的な制約がありました。我々が働きかけて議員立法で法律ができたのですが、文化庁の皆さんも、これは京都さんが中心になって議員立法で作ったものだからということで、割とクールな感じで、自分たちのものとしてはなかなか身近なものとして考えてくれてなかったというふうな現状がございます。ひとつの展開が見えてきているのは、おそらくこの3月には、文化庁の京都移転がございますので、この京都移転を契機にして、古典の日推進委員会と文化庁との協働的な活動を広げていこうということで、文化庁も11月1日の古典の日の前日のメインのフォーラムを共催でやりましょうというところまで来ました。

今後どうするのかということについて言うと、国、文化庁との協力関係を緊密にしていくということが大事だろうというふうに思います。当然、我々のレベルで地域のいろいろな文化の団体の皆さんとコミュニケーションしていくのですが、国レベルでやっていく

というところで文化庁との協力関係、やっと共催もできた。文化庁はこの20年ぐらい、もっと長くやっているかと思いますが、国民文化祭というのをやっているのです。各都道府県持ち回りで、例えば、今年は沖縄で国民文化祭、来年は石川県の金沢でというふうに各都道府県がそれぞれ持っている文化を全国に向けて発信する文化の祭典です。方法論の一つとして、そういう文化庁の国民文化祭と協力関係を作っていく。国民文化祭の開催している都道府県とうちの古典の日、ちょうど国民文化祭も11月1日を中心に2、3週間やっていますから、そういう中で共通してできることは何だろうというところで、古典の部分で協力関係を作っていくって各府県に広げていくというのが、非常に具体的なステップとしてあるのかなと考えています。国民文化祭と古典の日のフォーラムということを協働して広げていくと。例えば今年は沖縄から古典の日のフォーラムに、組踊が来てくれます。こういう形で、沖縄の国民文化祭とうちの古典の日が結びついていくと。これについては沖縄の玉城デニー知事からメッセージがちゃんと届くという形になっています。そういう形で全国に広げて一步一步広げていくということが可能なのかなと考えています。

それから、一つ目の質問については、いろんな意味で難しい側面があるのはもう十分に認識しているのですけれども。よりよく生きるためにということは当然、それは我々の古典の日の宣言に書かれている精神と全く一致するところですから、この辺は問題ないと思います。けれども、要するに古典と明治以降の日本の教育というところでお話された、日本が文明化する、文明開化って何なのかというと、文字通りそれはもう自然科学ですよ。それこそがヨーロッパの生み出してきた文明そのもので、それを日本の明治政府は明治10年代にかけて取り入れてきたっていうのが、日本のある意味での文明化で、間違いなくそれは近代化の礎石になってきているわけですね。ただ、恐るべきことは、文明開化の時代に、明治政府が二本柱として東大に機械や科学を取り入れて、それを最優先し、日本の古典などというのは馬鹿にしてみんな捨ててしまえというふうなことがあったのだと思います。恐るべきことはそれが今も続いているのです。

今、日本に大学がいくつあるか知りませんが、国文学の学生はどんどん減っているのです。それはもう揺るぎなく、明治以降の文明開化、物質文明の発達神話が今でも日本を覆っているからです。これはヨーロッパ、アメリカに比べて日本は一番すごいと思います。ヨーロッパの方がまだ、自ら作った文明観から抜け出そうとしているという感じがあるのですが、日本というのはいまだに大学でもリベラルアーツというのはどんどん捨てられているわけです。いきなりあなたたち英語を喋りなさい。いきなり実用英語をやりなさいと、ヨーロッパに追いつくのですよ、ITですよと、一気に行くのです。ですから、私が話したようなことはもう本当に難しい、より難しくなっている現状があるというのが私の認識です。

つまり、日本人の持っている物質的な文明観、文明で文化ではない。古典の日がやろうとしているのは文化です。文化というものの良さみたいなものが残されていかないと、文明というのはその上の仇花になってしまいます。文化はどこにあるかというと地域にあります。

日本の地域の民衆の中に祭礼、宗教も一部かもしれませんが、そういう文化というのは地域の中にあります。そういうものがどんどんなくなって、それで物質文明が花ざかりです。名前はいいませんが、京都のある大学では、企業の経営者が大学に乗り込んでいって、リベラルアーツを一切無視し、早く英語が喋れて、機械の設計図がかけて、そういうことで4年間を使いなさいという大学が生まれているのです。

こういうのが現状ですから、そういう意味で言えば古典の未来なんていうのは甘くないですね。ただ、そういう時代であるからこそ、古典の日宣言の中でも言っているように、この世の中、動乱の時代に、そういうものを見つめ直す地図みたいなものはそこに求めていくべきだし、それを広げていく努力はしていかなければいけない。具体的な方法論として一気に解決する方法はありません。それは今の現代文明を否定するということに近くなりますからね。それはやり過ぎだし、一気に持って行こうとすることもできません。僕たちができることは、先ほど申しましたように、古典の日未来賞というものを作って、学生たちだけじゃなくって次の職工さん、陶芸家、染色工、そういう職人さん、あるいは歌舞伎、文楽を、中学を卒業して引き継ごうとしている子どもたちにモチベーションを少しでも与えられるようなこと。先ほど言いました全国展開、国民文化祭、文化庁との協働も同じくらい、次の世代の動きとして未来賞として新設しました。現代文明の中での日本の今の動きの流れの中では本当に小さいことかもしれないけれども、やっぱりそこから始めていくしかないのではないかなというのが僕の感想です。

それに値するものがあると思っていますから、今日の表題ではないですけども、「古典をいただき、古典に抱かれて」ということを申し上げたということです。私も古典に抱かれているほうで、いだいて何かできているかといえば、できていないかもしれませんが。

《第 21 回セミナー》

2020 年オリンピック東京大会における

スポンサーシップと新聞報道

森津千尋（会員・宮崎公立大学）

1. 報告の趣旨

2020年東京オリンピックでは、複数の企業が国内スポンサーとなり、そこには新聞 6 社も含まれていたため、「報道機関」が五輪スポンサーとなることの是非についての議論がありました。今回の報告では、実際にスポンサー新聞ではどのような報道が行われ、非スポンサー新聞の報道と違いがあったのかについて、テキスト分析・言説分析を通して明らかにしていきます¹。

2. 研究の背景

2-1. 五輪収益の 9 割が放送権とスポンサーシップ

分析に入る前に、研究の背景として、国際オリンピック委員会（IOC）が公表しているオリンピックの収益について、表 1・2 を提示しておきます。この表にあるように、IOC やオリンピック組織委員会（OCOG）の収益の大半がメディアやスポンサーによるもの다는ことは、既によく知られているところです。ただし近年では変化もあり、メディアにおいてはストリーミング配信の開始など、またスポンサーシップでは「1 カテゴリーにつきスポンサー1 社」からの転換といったことがあげられます。

表 1 IOC 収益

（収益単位：百万ドル）

	1993-1996	1997-2000	2001-2004	2005-2008	2009-2012	2013-2016	2017-2020/21
放送権	1,251	1,845	2,232	2,570	3,850	4,157 (73%)	4,543
TOP	279	589	663	866	950	1,003 (18%)	2,295
合計	1,530	2,434	2,895	3,436	4,800	5,160	6,838

※TOP(The Olympic Partner)とは、IOC と契約する最高位のグローバルスポンサーシッププログラムのこと。

表 2 OCOG 収益

（収益単位：百万ドル）

	1993-1996	1997-2000	2001-2004	2005-2008	2009-2012	2013-2016	2017-2020/21
国内スポンサー	534	655	796	1,555	1,838	2,037	3,732
チケット	451	625	411	274	1,238	527	146
ライセンス	115	66	87	185	170	74	131
合計	1,100	1,346	1,294	2,014	3,246	2,638	4,009

¹ 本報告は、『スポーツ社会学研究』30(2)に掲載されている「2020 年オリンピック東京大会におけるスポンサーシップと新聞報道」の内容をもとに構成している。

2-2. 2020 東京大会の「オールジャパン」体制

東京大会では、国内企業67社が国内スポンサーとなっています。ただし表3にあるように、過去の大会と比較すると、東京大会のスポンサー数だけが突出して多いわけではなく、同じもしくはそれよりも多いスポンサーが参加している大会もあります。東京大会が特徴的なのは、スポンサー数よりもスポンサー収益が高額な点です。

東京大会において、多くのスポンサーもしくはスポンサー料が集まった理由として、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会（以下 TOCOG）が、「東京方式」として、同一の業種／製品カテゴリーにおいて複数企業とのスポンサー契約を可能としたことがあげられます。銀行、新聞、旅客航空等の9カテゴリーで25社が契約し、さらにカテゴリーの細分化が行われた結果、国内スポンサー67社の半数以上が同業他

社とともにスポンサー契約していました。大会開催が決まった時点で、企業側は「東京開催が決定してから当社を含め、業界の各社はどのようなかたちで東京2020に関われるのかを模索していました」とスポンサーへの意欲を示しており、国内スポンサーの目的は、オリンピックを利用して自社の利益を生むことではなく、大会に関わり連帯することで自社の存在価値を確認することであったといえます²。

このような日本国内の状況について、小笠原氏は「東京大会では、日本のあらゆる団体や個人の「参加」は当然のこととして語られ、「感動を共有する」という図式のもと、人びとは肯定的に参加へと駆り立てられて」といくと説明し、このような動員の力を「参加型権力」と指摘しています。そして「利益」ではなく「感動」を担保に自発的に参加させることで、オリンピックの強化、ブランド化がおこなわれているとしています〔小笠原，山本 2019：26〕。

表3 各大会の国内スポンサーの数

(収益単位：百万円)

	大会	国内スポンサー数	収益
1996	アトランタ	111	426
2000	シドニー	93	492
2004	アテネ	38	302
2008	北京	51	1,218
2012	ロンドン	42	1,150
2016	リオ	53	848
2020	東京	69※	3,240

※大会開催時のスポンサーは67社、その他にオフィシャルコントリビューター4団体があった。

3. 研究対象と方法

以上のような点を研究の背景として、ここから東京大会のスポンサー／非スポンサー新聞の社説を比較していきます。今回の分析対象はオフィシャルパートナーの朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、日経新聞の4紙と、スポンサーではない河北新報、東京新聞、宮崎日々新聞以下（宮日新聞）、沖縄タイムスの4紙としました。期間はスポンサー契約の延長期間が始まる2021年1月1日から2021年8月31日まで、オリンピックについて言及している社

² 「企業広告を通じてユニバーサル社会を浸透—東京2020に向けて機運を醸成へ」『企業と広告』2017年9月号。

説（朝日新聞48件、毎日新聞63件、読売新聞47件、日経新聞33件、河北新報38件、東京新聞57件、宮日新聞45件、沖縄タイムス38件）をテキストデータ化し、テキストマイニングを行った後、言説分析を行いました。

4. 研究結果

4-1. 社説に頻出する語句

表4は、スポンサー/非スポンサー新聞について、大会開幕前（2021.1.1～7.22）と開幕後（2021.7.23～8.31）の社説における頻出語上位10位までを示したものです。開幕前はどちらも「感染」が最も出現しており、次に「オリンピック」「コロナ」「政府」「開催」「首相」「対策」「観客」の語句が共通して出現しています。そして開幕後は、スポンサー新聞では「選手」「競技」の出現頻度が上昇し「政府」「首相」「観客」が下降、また非スポンサー新聞では、「選手」「拡大」が上昇し「政府」「首相」「観客」が下降していました。

この結果から、スポンサー／非スポンサー新聞ともに開幕前の中心的話題は「コロナ／感染／対策」、「政府／首相」、「選手／観客」であり、また開幕後は、ほとんどの競技が無観客となったことから「観客」の話題は減少し、「選手」「競技」への言及が増加したことがわかります。

表 4 社説における頻出語

	スポンサー新聞(4紙合計)		非スポンサー新聞(4紙合計)	
	大会開幕前	大会開幕後	大会開幕前	大会開幕後
	抽出語(出現回数)	抽出語(出現回数)	抽出語(出現回数)	抽出語(出現回数)
1	感染 (455)	選手 (224)	感染 (413)	感染 (178)
2	オリンピック (350)	感染 (166)	オリンピック (269)	オリンピック (150)
3	政府 (261)	オリンピック (140)	コロナ (263)	選手 (144)
4	コロナ (233)	大会 (125)	開催 (245)	コロナ (94)
5	開催 (232)	競技 (97)	政府 (236)	開催 (89)
6	首相 (223)	コロナ (95)	首相 (228)	拡大 (76)
7	対策 (215)	開催 (92)	対策 (202)	大会 (75)
8	選手 (203)	政府 (92)	観客 (191)	日本 (74)
9	観客 (203)	日本 (91)	大会 (178)	政府 (67)
10	日本 (202)	対策 (71)	日本 (168)	対策 (67)

4-2. 「オリンピック」関連語

次にこれら話題のなかで「オリンピック」がどのように語られたのかを詳しくみるため、「オリンピック」の関連語について検討していきます。表4は、「オリンピック」と関連の高い語句を、スポンサー／非スポンサー新聞別で探索した結果です。Jaccard 係数は双方の言葉がどのくらい同時に出現するかの程度を示すものであり、値が高いほど「オリンピック」との関連が高いとみなすことができます。

まずスポンサー／非スポンサー新聞とも「オリンピック」と「開催」との関連がみられ

ました。また非スポンサー新聞では、開幕前には「コロナ」「感染」、開幕後は「感染」「選手」との関連もありました。つまり非スポンサー新聞では、大会前後を通し「オリンピック」に関する話題においては、「開催」と同時にコロナ「感染」についても言及していたことがわかります。

表 5 オリンピックの関連語

スポンサー新聞(4紙合計)				非スポンサー新聞(4紙合計)			
大会開幕前		大会開幕後		大会開幕前		大会開幕後	
関連語句 (Jaccard係数)		関連語句 (Jaccard係数)		関連語句 (Jaccard係数)		関連語句 (Jaccard係数)	
1 開催	(0.1766)	開催	(0.1385)	開催	(0.2083)	開催	(0.2)
2 コロナ	(0.0809)	選手	(0.0818)	コロナ	(0.1159)	選手	(0.1088)
3 組織委員会	(0.0665)	大会	(0.0689)	感染	(0.1072)	感染	(0.1019)
4 開幕	(0.0537)	コロナ	(0.049)	観客	(0.0892)	復興	(0.0936)
5 選手	(0.0534)	ウイルス	(0.0462)	首相	(0.0852)	大会	(0.0857)

4-3. 「オリンピック」と「感染」の言説分析

以上のようなテキスト分析の結果をふまえ、次に、スポンサー新聞と非スポンサー新聞における「オリンピック」と「感染」の関連について、言説分析を行っていきます。

まずスポンサーではない新聞についてです。東京新聞では、「東京オリンピックの聖火リレーが、新型コロナウイルス感染拡大のリスク要因になってはいないか」と聖火リレーでの感染拡大の危険性について言及し、また宮日新聞は「コロナの感染拡大につながりかねないオリンピックの開催」、沖縄タイムスも「五輪を開催すれば、感染拡大のリスクは高まる」と、「オリンピック」の「開催」を語る文脈のなかで「感染」に対する懸念が示されていました〔東京新聞 2021.4.8〕〔沖縄タイムス 2021.5.25〕〔宮日新聞 2021.6.11〕。また開幕後も、河北新報では選手村での集団感染についてふれており、沖縄タイムスも大会開催による感染拡大について検証するよう訴えていました〔河北新報 2021.8.9〕〔沖縄タイムス 2021.8.24〕。このように非スポンサー新聞の社説では、オリンピック開催は国内の感染拡大と同じ文脈のなかで、直接関連のあるものとして語られ、その影響を懸念して対策や検証の必要性について議論していました。

一方スポンサー新聞の社説では、「感染」の出現回数は多いものの、「オリンピック」と「感染」の関連はみられず、これは各紙別でみた場合も同様でした。つまりスポンサー新聞の社説では、ウイルスの広がりを示す「感染」という語句は、「オリンピック」とは切り離され、別の文脈で語られており、オリンピックと新型コロナウイルスの関係は、次のように分離して位置づけられていました（下線は筆者によるもの）。

東京五輪の開会式の日を迎えた。鍛え抜かれたアスリートたちがどんな力と技を披露してくれるか。本来ならば期待に胸躍る時だが、コロナ禍に加え、直前になって式典担当者の辞任や解任が伝えられ、まちは高揚感も祝祭気分もない。とにかく大会が

無事に終わってほしい。多くの人に共通する率直で最大の願いではないか [朝日新聞 2021.7.23]。

57年ぶりの東京五輪が幕を閉じた。新型コロナウイルスの世界的な流行という困難を乗り越えて開催された異例の大会として、長く語り継がれるだろう。今大会は、史上初めて開幕が1年延期され、大部分の会場が無観客になるなど、新型コロナの影響によって、当初計画から度重なる変更を余儀なくされてきた。[読売新聞 2021.8.9]

どちらも「コロナ禍」や「新型コロナウイルスの流行」について言及していますが、大会の外側にある「まち」や「世界」の状況として説明されており、大会内側での「感染」や、またそれが市中での感染拡大につながる／つながった可能性については述べていません。このようなスポンサー新聞の語りは、TOCOGが提唱した感染対策の「バブル方式」と同じ構造だといえます。

4-4. オリンピックと「復興」の言説分析

次に「オリンピック」と「復興」について、スポンサー新聞では関連がみられませんでした。非スポンサー新聞3紙（河北新報:0.968、東京新聞:0.952、宮日新聞:0.122）では開幕後に弱い関連がみられました。スポンサー新聞の社説では「復興」の出現回数自体が少なく、4紙合わせても開幕前13回／後8回でした。非スポンサー新聞は開幕前40回／後29回であり、そのうち宮城県に本社をおく河北新報は、開幕前後を合わせ33回と最も多い結果となりました。

また非スポンサー新聞のなかでも、東京新聞と宮日新聞では、そもそも「復興」をスローガンに掲げたことの是非も含め「復興五輪」を否定的に捉えていました。東京新聞は、「復興五輪を掲げて誘致に至った大会は、その理念を実現していない」むしろ「東京電力福島第一原発事故の被災者は「復興五輪」という言葉に追い詰められてきた側面すらある」と指摘し、東京大会を「復興が道半ばであるという現実と向き合い続ける契機」にすべきとしていました [東京新聞 2021.8.4]。また宮日新聞でも「単なる競技実施だけで終わらせては、オリンピック招致の名目に被災地を利用したとのそしりは免れないだろう」と、「復興五輪」の意味やその目的への問い直しが行われていたと言えます [宮日新聞 2021.7.23]。

一方、河北新報では、先の2紙ほど「復興五輪」を強く否定するような論調は見られませんでした。聖火リレーは「復興オリンピックを象徴するイベント」であり、女子サッカー等の初戦が被災地で開催されることについては「復興を伝える機会は極めて限られることになった。それでも、諦めずに、発信に力を尽くすべき」と期待を示し「復興」と「オリンピック」の関係に対し肯定的でした [河北新報 2021.3.25] [河北新報 2021.7.21]。しかし開幕後は、政府やTOCOGの対応の遅れに対し「東日本大震災からの復興オリンピ

ックという理念」について「被災地と関係者が、何を、どう発信するかを検討する時間はあったはず」と苦言を呈し、閉幕時には「東日本大震災からの「復興オリンピック」という理念は、十分に発信できただろうか」と疑問を投げかけました〔河北新報 2021.7.23〕〔河北新報 2021.8.9〕。河北新報記事には、「復興五輪」に対して反対ではないものの現状に対する懐疑的な視点が存在していたと言えます。

また数は少ないですが、スポンサー新聞の「復興五輪」に対する言及もみておきます。朝日新聞は、前の安倍政権への批判として「16年大会の招致に失敗すると東日本大震災からの復興を目的に持ち出し」と述べていますが、他の3紙はスローガンに掲げたこと自体への問い直しはせず、コロナ禍によって「復興五輪」が阻まれたことを説明していました〔朝日新聞 2021.7.23〕。毎日新聞では、大会開催の意義が「コロナに打ち勝った証し」と強調されるにつれ、「復興が大会の意義に掲げられてきた」ことが震んだと述べ、日経新聞でも、海外客の受け入れを中止したことで「東日本大震災からの復興ぶりを海外に示すチャンス」が失われたと説明していました〔毎日新聞 2021.3.26〕〔日経新聞 2021.3.23〕。また読売新聞は、「コロナ禍で海外の人たちに復興の様子を見てもらうことはかなわなかったが、表彰式ではメダリストに被災地の花束が贈られ、選手村の食事には現地の食材が使われた」と部分的に「復興五輪」が達成できたと評価しました〔読売新聞 2021.8.9〕。

以上のように、「復興」への言及が多い非スポンサー新聞では、被災地の現状を報じながらもそもそも「復興五輪」とは何だったのかを問い、コロナ禍以前から存在する問題として「復興」と「オリンピック」の関係について論じていました。それに対し「復興」への言及が少ないスポンサー新聞では、「復興五輪」が「達成」されたかどうかに関心があてられており、その目的や理念が達成できなかったのは、新型コロナウイルスの影響として説明され、「復興五輪」を掲げたこと自体への問い直しは行われませんでした。

4-5. 「スポンサー」についての言及

最後に、「スポンサー」についての言及をみていきます。社説にて「スポンサー」に言及した回数は、朝日新聞3回、毎日新聞6回、読売新聞1回、日経新聞1回、河北新報3回、宮日新聞4回、東京新聞2回、沖縄タイムス4回と、スポンサー／非スポンサー新聞ともに少ないですが、ここでは複数の新聞で取り上げられた話題を紹介します。

まずはTOCOGの森喜朗前会長の「女性蔑視発言」とその後の退任に対する「スポンサー」の態度についてです。例えば、河北新報では「オリンピックスポンサー企業から厳しい批判や苦言が噴出している」と紹介し、また読売新聞でも森氏の退任は「選手やスポンサー企業からの批判が強まったためだろう」とし、毎日新聞も「最後はスポンサーやIOCまでもが見切りをつけた」とオリンピック理念に反した森氏の言動に対するスポンサー企業からの批判が紹介されていました〔河北新報 2021.2.11〕〔毎日新聞 2021.2.13〕〔読売新聞 2021.2.13〕。

次に、オリンピックの「商業主義」を指摘するなかで、「放送局」と「スポンサー」の影響について取り上げていました。朝日新聞ではオリンピックが「米国のテレビ局や巨大スポンサーの意向」に左右されているとし、また宮日新聞も「放映権料や企業からのスポンサー料に頼ったオリンピックの運営に疑問の声は根強い」としていました〔朝日新聞 2021.7.23〕〔宮日新聞 2021.7.24〕。さらに日経新聞は、開催時期の決定に北米テレビ局の意向が反映されており「視聴率やスポンサーとの関係で選手や観客の健康を犠牲にするのは本末転倒で、改めるべき時期に来ている」と提言しました〔日経新聞 2021.8.9〕。

以上のように、スポンサー新聞であるか否かに関わらず、社説における「スポンサー」への言及は少なく、新聞社説全体として、スポンサーシップについての議論には消極的でした。また言及する場合は、国内／海外スポンサーどちらを指すかによって位置づけが異なり、森前会長への批判のように、国内での問題において、主に国内スポンサーが取り上げられる場合は、オリンピック理念を守る立場として位置づけられ、一方「商業主義」として批判される場合は、北米放送局と共に TOP の海外スポンサーが指し示されていたといえます。

4-6. 新聞スポンサーについての言及

今回調査対象とした社説では新聞社のスポンサーシップについての言及がなかったため、一般記事まで範囲を広げて検索した結果が表 6 です。2021 年 2 月 9 日の毎日新聞記事は、毎日新聞が自らスポンサーであることを示して森氏発言を批判した内容ですが、それ以外は、新聞社がスポンサーであることに否定的な記事でした。これらは大会開催の是非が議論され始めた 5 月頃から掲載されますが、いずれも研究者や作家のインタビュー、寄稿といった外部からの問題提起として提示されていました。

表 6 「新聞スポンサー」について言及した記事

毎日新聞	2021/2/9	東京五輪・パラリンピック：森氏発言、スポンサー苦言 女性蔑視「五輪理念外れる」組織委員会
朝日新聞	2021/5/27	コロナ禍と五輪 傷にふれて、語りつげるか 東京大学大学院教授 林杏里
沖縄タイムス	2021/6/1	五輪とメディア「感動」あおり追求甘く「参加感」がもたらす幻滅
宮日新聞	2021/6/27	コロナ禍の東京五輪を問う(下)経済学者 暉峻淑子さん/無関係ではいられない 責任の所在を明らかに※
東京新聞	2021/7/3	こちら特報部 首相五輪「無観客言及」でもその前に(下)
毎日新聞	2021/7/8	開かれた新聞委員会：2021座談会(その1)ワクチン、政権の思惑は (その2)五輪、本当に安全なのか
沖縄タイムス	2021/7/16	コロナ禍の東京五輪を問う/異例の開催 警鐘ならす識者/あまりに大きな代償 暉峻さん※
朝日新聞	2021/8/17	(山腰修三のメディア私評) 報道の現場でも 公正性損なう「企業経営の論理」
朝日新聞	2021/8/17	(インタビュー)五輪に見た、内向き日本 京都大学大学院教授・佐藤卓己さん

また朝日新聞の 2021.8.17 付けのインタビュー記事では、「五輪中止」を政府に訴えた朝日新聞社説について、佐藤卓己氏から以下のように指摘されています。

ただ、社説が出る前から、五輪への支持率が低いことは世論調査で明らかになってい

ました。調査結果の報道前に書けば勇気あるオピニオン（輿論〈よろん〉）だったと思いますが、国民感情を盾に社説を出したように見えました。世間の空気（世論〈せろん〉）を反映しているだけだから大丈夫、という心理も働いていたように感じます。

佐藤氏は著書においても、公的な意見としての「輿論」と世間の雰囲気を反映した「世論」は異なるものであり、戦後その区別を消し去ったことで、新聞等で、輿論を担う主体の責任が曖昧化されたと指摘しています[佐藤, 2008 : 314]。2020年東京大会においても、社説にて新聞スポンサーの議論はされず、大会直前になって外部からの批判として記事を掲載したのは「世間の空気」を反映したからであり、特にスポンサー新聞は、大会スポンサーという立場が言論機関としての主体性をより曖昧にさせたといえます。

5.分析まとめ

まずテキスト分析の結果についてですが、社説の頻出語からみると、スポンサー新聞／非スポンサー新聞で扱う話題に大きな違いがなかったことがわかりました。そして「オリンピック」関連語においては、スポンサー新聞では「開催」のみでしたが、非スポンサー新聞ではその他に「感染」「復興」が抽出され、オリンピックに対する「語られ方」に違いがあることがわかりました。

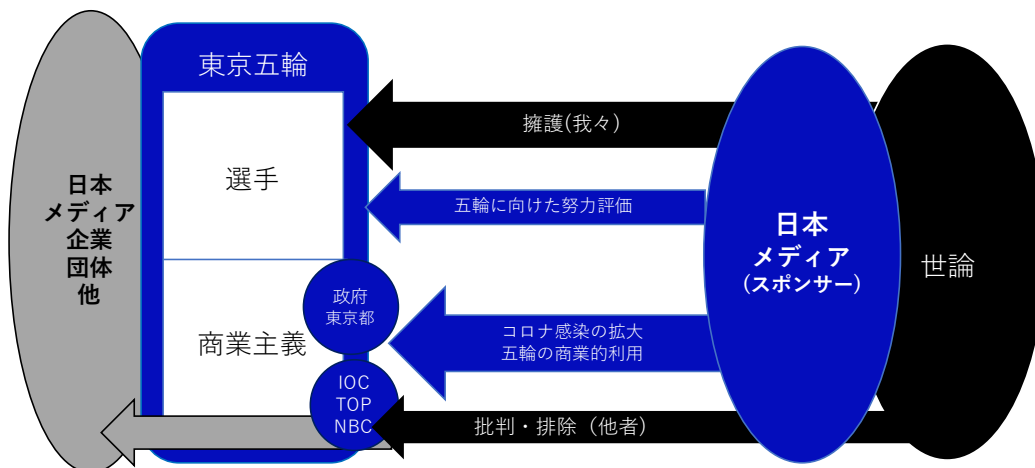
そこで「オリンピック」の関連語について言説分析をした結果、「オリンピック」と「感染」においては、スポンサー新聞は、両者を分離し位置づけているのに対し、非スポンサー新聞では、両者を関連するものとして語っていました。さらに「オリンピック」と「復興」については、スポンサー新聞では、「復興」についての言及自体が少なく、それに対し非スポンサー新聞では「復興」への言及が多く、また「復興五輪」自体への問い直しが行われていました。

最後に、「スポンサー」への言及はどちらも消極的であり、国内／外スポンサーで位置づけの違いが見受けられました。また「新聞スポンサー」については、どちらも社説での言及はなく、一般記事においては、外部からの批判＝「世論」として掲載されていました。

図1にあるように、東京大会における日本メディアの態度は、世論を背景として、選手を擁護しつつ、五輪の商業主義を批判するというものでした。メディアは批判の矛先を、政府や東京都、またはIOCや、TOP、北米のテレビ局に向けることで、自らがスポンサーであることを不可視化させていたといえます。また研究の背景で説明したように、東京大会が「オールジャパン」体制で進められていたことをふまえると、これはメディアだけに限らず、日本全体が抱える問題だと考えます。

図1 東京大会に対する日本メディアと世論の評価

東京大会に対する世の中の意見(世論)を反映→選手擁護・商業主義批判
 →五輪スポンサーの立場は不可視化される



参考文献

樋口耕一, 2020, 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版.

IOC, 2021, OLYMPIC MARKETING FACT FILE: 2021 EDITION, Olympic World Library, Retrieved September 1, 2021, <https://library.olympics.com/Default/doc/SYRACUSE/735120/olympic-marketing-fact-file-2021-edition-international-olympic-committee>.

小笠原博毅, 山本敦久, 2019, 『やっぱり知らない東京オリンピック』, 岩波書店.

佐藤卓己, 2008, 『輿論と世論—日本的民意の系譜学』, 新潮社.

《黒田勇（理事・関西大学名誉教授）のコメント》

今日はオリンピックに関する論客、あるいはオリンピックを進められていた方がたくさん参加されていますので、中身の議論というのは後ほどしていただくということで、ちょっと外側の議論をした方がいいと思いますので、少しお話をします。

オリンピックのスポンサー問題は、皆さんご存知のように、1984年に民営化されているわけですが、社会学なり、メディア論の研究の立場から言うと、そのスポンサーがイベントに与える影響という研究、あるいはそういう問題意識の研究が非常に多かったわけですね。ところが、スポンサーシップがメディア報道に影響を与えるかという議論は、実は、あまり多くはなかったのです。あったのですけれども、非常に「規範」的な議論が多くて、そのスポンサーがメディアの報道にどのような影響を与えているかという実証研究というのは多くはなかったと思うのです。そういう意味では、この森津さんの研究は、なかなか面白い研究だと思います。

もう一つは、最近、KH コーダーを使用しての分析が非常に流行っています。記事、言葉を量的にまとめて、まさにコンピュータの発達あってこそ研究なのですが、この KH コーダーというソフトが知れ渡ってから、私なりの言葉で言えば、ちょっと安易な研究が多かったのですね。量的な分析というよりも、分析以前のまとめだけの研究があったりしたので。けれども、その量的分析と、それをベースにしたしっかりとした質的な分析、そこから考察するという手法が評価されて、今回のスポーツ社会学会の研究紀要に載ったのではないかと思います。

報告の中身なのですが、私自身はスポンサーシップがメディア報道にどう影響を与えるかということに大きな関心を持っていました。2007 年の「世界陸上」が大阪大会で、このときに大学院の私のゼミで研究をしました。今日の研究報告と関係があるので、少し触れます。

独占放送権を獲得していた TBS とスポンサーになった読売新聞がどういう報道したか。当たり前のことなのですが、読売新聞は非常に好意的な報道をし、さらに TBS 系列は中継も含めて編成上、非常に大きな時間を割きました。一方で、それ以外の新聞やテレビ局というのは、無視をする、あるいは新聞社は地味な報道をしました。今日の話で言いますと、非スポンサー社に当たるのですが、世界陸上の開催運営についての批判的な記事を掲載しています。非スポンサーのテレビ局は、編成上、ほぼ無視をし、スポーツニュースも取り上げないような状態になりました。そういう調査研究をしました。このときの問題点というのは、今日の問題点と重なるのかもしれませんが、こういうイベント開催には直接・間接的に大阪市の公金が投入されているし、さらにその市民を説得するためにも、市民のスポーツ文化を活性化するという、名目がされていたわけです。

そうすると、やはりそこにイベントの公共的側面があるということになるわけです。にもかかわらず、一方で、公共圏を形成すべきメディアであるテレビも新聞も、スポンサーなのか、あるいは独占放送権保有者か否かという立場から、イベントにアプローチをしてしまっていました。その結果として、メディアの公共的役割あるいは情報の公共圏の形成という観点から問題がある、これが実証データからの私の主張だったのです。今回の研究報告に関してですが、各新聞社がスポンサーになることについては、その是非については、かなり以前から問われています。ジャーナリズム規範論として議論する人は多かったわけですが、研究として理論的な組み立てが不十分なままで、何よりもそのスポンサーシップがどのように紙面に影響を与えるのか、あるいは影響を与えたのかというのは実証研究はなされないままでした。この点で森津さんの研究というのはやっぱり意義があるのだと思います。

さらに、より根本的な問題なのですが、日本においては、スポーツは新聞事業とともに発展してきました。スポーツ紙ができる以前から、新聞社がスポーツ大会を組織したり、統括団体の組織化を進めたりする、そういう歴史があるわけですね。その中でいち早く朝日新聞社が日本サッカー協会のスポンサーになったり、読売新聞がオリンピックスポンサー

になったりすることが、当事者のメディア側には大きな違和感はなかったのかもしれませんが。

ただ今回、東京大会については、招致段階から商業的、政治的な思惑、そして疑惑が渦巻いていました。そのこともあり、JOC の体制についての取材報道をすべき新聞社がこぞってスポンサーになったことに注目が集まる結果になったわけです。他のスポーツイベントとは違って、オリンピックについては、新聞社が、そのスポンサーシップから便宜を期待するような、そういうことではおかしいじゃないかという規範論がありました。他方で、先ほどの報告にもありますように、新聞社自体が協賛と報道とは別なのだという議論、基本的にはスポーツは娯楽であって自ら主催しても共催しても問題ない。営業部門と報道部門は違う、機能は別なのだ、という議論も一方で成立するわけです。

そういう背景があって今回の研究で、皆さんはいかがだったでしょうか。新聞のスポンサーシップが報道どのような影響を与えたのかという問題意識、多くの人が期待した結果が出ていなかったのではないかと思います。期待してなかったというのは、ちょっと失礼かもしれませんが、期待通りのこんなひどい偏差がある、偏りがあるというような結果にはならなかった。しかし、その議題設定に差異があることが明らかになったわけで、その差異というのが新聞のスポンサーシップの是非として、問題のあるものなのか、あるいは新聞社の新聞報道の多様性として問題ないものなのか。その辺はこれからの議論になると思うのですが、私としては森津さんの報告というのは社会学的な研究としては議論の根拠となるデータを提供したということで非常に面白い研究報告だったなと思っております。

子ども未来・スポーツ社会文化研究所季刊誌第7号（2022年冬号）

発行日 2023年1月10日

編集・発行者：子ども未来・スポーツ社会文化研究所代表理事 杉本厚夫

編集委員：西山哲郎、速水 徹、谷口輝世子、三角さやか（幹事）

一般社団法人 子ども未来・スポーツ社会文化研究所

Research Institute for the Future of Children and Sport Social Culture

<https://fcssc2020.jp> E-mail: info@fcssc2020.jp

